

連載

41

在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (63歳・内科)

糖尿病合併症の悲劇
～そして、足の切断となった～
(新たな臨床治療学再構築が急務!!)



平成9年ころの、初診の在宅患者さん(現在90歳・女性)の話です。糖尿病に高血圧症そして脊柱管狭窄症せきちゅうくわんさうさうじょうを患っており、閉じこもりがちの患者さんでした。経口糖尿病薬を服用していましたが、服薬も忘れがちで腰痛もあり、散歩も消極的なため運動療法は不十分だったのです。当然ながら、糖尿病血糖コントロールは不良で、腎障害や視力障害、脱疽だつしゅなど重篤な合併症発症の可能性を説明しながら、生活指導をしていましたが独居のため困難を極めました。

その後、平成11年に乳がんちちがんと診断を受け手術となりました。その入院中に糖尿病教育を行い、在宅療養となってからも頻回の指導を行い、なん

とか糖尿病血糖コントロールは安定していきました。ですが、平成20年ころ、残念ながら糖尿病性脱疽により右足切断手術をすることとなったのです。平成24年には、急性硬膜下血腫となり九死に一生を得ましたが、障害が残り、現在は特別養護老人ホームに入所中です。

現在の医学では、“がんの進行”や“糖尿病の合併症-脱疽”と、よく出くわす病状なのです。

視点を変えてみると、血液が粘くなる病態で、東洋医学では『瘀血おけつ』といいます。つまり、がんや糖尿病になったということは、血液が“サラサラ”から“ドロドロ”になり末梢の血流障害をきたす体質(遺伝)があるということなのでしょう。

患者さんの悲惨な病状をみるにつけ、最近私はふと、世界の治療学を再度急ぎ検証しなければといった衝動にかられたのです。

今年(平成25年4月)に当院では、臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)の研究室を発足いたしました。

がん・糖尿病・脳梗塞・心筋梗塞など成人病が極度に悪化するタイプは、瘀血(血液が粘り～Hyper Blood Viscosity)であり、遺伝子(DNA)と深く関連していると思われます。世界に目を向けるとすでに治療(予防)学も確認されています。

今回、私たちは『真の臨床治療学』へのさらなる歩みの大切さを再認識いたしました。

「お医者さんが来てくれる」
質の高い在宅医療・看護・介護
を『千舟町クリニック』は目指しています。



Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>